

優秀賞

祖父から得たもの

長崎県 向陽高等学校二年 吉田 七菜

今年も赤いトマトの実が生った。私の家の庭では一年中、野菜が採れる。今は、祖母と母が毎日かかさず手入れをしているからだ。

私は、一歳ごろから母方の祖父母と一緒に住んでいる。父が単身赴任中だったため、祖父についてまわり、よく遊んでもらっていたそうだ。初め引越してきたばかりの時の庭は、花を少し植えられる程度の花壇しかなかったそうだ。そんな庭を、昔から家庭菜園が趣味だった祖父が「家族が健康に暮らせるように」という思いで、土づくりから一年半かけて野菜畑にしたらしい。

私は当時そんなことも知らずにただ春になれば家の近くに桜を見に行ったり、夏になればプールで遊び、秋には紅葉を見に行き、冬にはクリスマスパーティー。何をすることも祖父と一緒に遊んでいた。その中でも、祖父との一番の思い出はやはり「家庭菜園」だった。

「ななちゃん、ポリ袋持っておいで！」

夏の夕方になると、必ず祖父が声をかけてきた。

「今日も、トマトいっぱい生っているよ。」

を続けていた。私も少しでも祖父の助けになればと思ひ、話し相手になったり、要望を聞いて物を取ってあげたり、移動の時に手を貸してあげたり、車いすを押してあげたりしていた。晴れた日には気分転換に外に出ようと誘い、ウッドデッキに椅子を置き座ってもらい、畑を見たりおやつを食べたり、少しでも祖父の笑顔が見たいと思ひ手伝った。

私は中学三年生になった。進路を決める時期になりどうするか悩んでいたが、どの道を選択しても最終的には「福祉」の職にたどりつくことに気づいた。福祉の仕事は大変だと祖母や母の介護を見ていたため分かっていったが自然とその道を選ぶことになっていた。

今、私はその道を進み、高校で「福祉」を学んでいる。専門教科で覚えることも多く、正直大変ではあるが、自分が決めた道なのでしっかり頑張っていこうと思ひている。授業の中で、障害や病気のことを詳しく習うたびに祖父のことを思い出すことがある。その頃は、「なんでじいちゃんは、こんなこともできないんだろう」と思っていたこともあったが、障害や病気を理解していく中でたくさん納得することが多く、もっと深く学びたいと思うようになった。二年生になると、医療的な技術も教えてもらうが、祖父があと少し長生きしていたら私がしてあげられたこともあったのではないかとと思うと寂しくなる。今年も夏も赤いトマトが実った。祖父が開墾してくれ

私と祖父は、二人で袋いっぱい赤く実ったミニトマトを仲良く採っていた。

それから五年経ち、私が小学校低学年の頃、祖父は野菜が作れなくなった。私が生まれた頃から発症していた難病が悪化し、体の動きが悪くなったためだった。祖父はパーキンソン病という病気だった。パーキンソン病とは、体のふるえや動作がゆっくりになる、筋肉がこわばり手足が動かしにくくなる、転びやすくなるなどの症状を特徴としている。初めは薬で調整できており、不自由なく生活していたのだが、加齢も加わり徐々に体の動きが悪くなっていった。

そんな祖父を見るのが正直辛かったし、かわいそうだと思っていた。そして何より、一緒に行っていた家庭菜園の野菜を収穫することも難しくなり、悲しい気持ちでいっぱいだった。

祖父の介護は祖母と母がしていたのだが、介護度が上がるにつれて祖母と母の負担が重くなり、施設のデイケアやショートステイを利用しながらなんとか自宅で生活



た畑に生ったものだ。祖父が亡くなって三年が経つが、いなくなっても私に残してくれたものは多い。健康になる様に野菜を作り、今もその畑で野菜が生り続けていること。祖父と暮らしたことで、福祉に興味が湧き、進路を導いてくれたこと。継続して努力すれば実を結ぶということ。他にも教わったことはたくさんある。

祖父に直接学んだことを生かしてあげることにはできなくなったが、祖父に教えてもらったことを礎に周りの人に感謝して夢に向かって頑張っていこうと思っている。